

余白

2.5cmX2.5cm

看護スタッフによる不妊カップルへの 精神支援の現状

山本真悠子¹⁾，片岡久美恵^{2, 3)}，秦久美子^{3, 4)}，
中塚幹也^{2, 3)}

1)岡山大学医学部保健学科，
2)岡山大学大学院保健学研究科，3)岡山県不妊専門相談センター，
4)兵庫大学健康科学部看護学科，5)岡山大学病院産婦人科，

【目的】

不妊症女性では，治療の長期化に伴い抑うつ傾向が高まることが知られ，85%の女性が「特別なストレスを感じている」ともされる¹⁾．このような精神負担に対して，不妊患者に寄り添い精神的支援を行うには，看護スタッフの役割は重要であると考えられる．しかし，看護スタッフの不妊患者への精神支援の実態は明らかになっていない．

【方法】

2012年8～9月，岡山県内の産婦人科施設35施設へ依頼し，同意を得られた24施設の医療スタッフ（医師を除く）348名を対象に，無記名の自己記入式質問用紙調査を施行した．尚，研究は岡山大学大学院保健学研究科倫理委員会の承認のもと施行した．

対象は，看護師190名，助産師81名，その他のスタッフ77名であった．全体の12.7%に自分自身が不妊治療をした経験があり，そのうち精神支援を受けたのは13.0%，その時に精神支援が必要だと思ったのは61.0%であった．

【結果】

不妊治療を受けている受診者と接したことがあるスタッフは85.0%であり，対象者から相談を受けたことがあるとの回答は46.0%で，相談内容として治療に関することでは「治療・検査内容について」「治療が上手くいかないこと」「治療終結について」の順，それ以外のことでは「パートナーとの関係性」「家族等との関係性」「生活上のこと」「経済面・金銭的なこと」などの順に高率であった．

不妊患者から「精神支援」を求められたことがあるとの回答は29.8%であった．98.1%が，誰かが精神支援を行うことは「必要」と回答し，また，59.8%が自身で精神支援を「したい」と回答したが，支援の難しさを感じているスタッフは94.7%と高率であった．

自分の施設で精神支援を行っているとの回答は29.3%，自分自身が精神支援を「行

っている」との回答は 21.9%と低率であった。実際に精神支援をしているスタッフは「医師」64.6%,「看護師」50.9%,「助産師」38.3%,「カウンセラー」12.6%であったが、カウンセラー等の専門職が中心となって支援すべきとの回答は高率であった。

約 9 割以上が看護スタッフによる精神支援を「必要」と回答したが、不妊治療を受けているカップルへの「精神支援」について学生時代に「学んだ」という回答は 7.2%と低率であり、「学んだ」とした内容も教科書の内容や一般的な心理学などであった。このため、学生時代に不妊症患者への精神支援について学ぶことが「必要」との回答は 85.8%と高率であった。

【考察】

今回の結果から、医療スタッフにおいて、不妊治療を受けているカップルへの精神支援の重要性についての意識は高いことが明らかになった。精神支援を行いたいと考えるスタッフも多かったが、実際に行っている看護スタッフは低率であった。不妊治療に伴う種々のストレスは、非常にプライベートな問題から発生している場合も多く、通常、看護スタッフが行っている医療的な指導とは異なり、看護スタッフの価値観をもとにした精神支援では逆効果な場合もある。

基礎的な精神支援についての知識に加え、不妊症カップルに接する体験や対応の経験数により理解が深まり、精神支援への意欲や能力が向上することが推測されるが、現時点では、学校で体系的な教育を受けることのできる場合は限られている。現時点の産婦人科臨床の現場では、個人が精神支援を行うのではなく、知識を共有し、能力を高め合うようなチームとして不妊症カップルへの精神支援を行う体制作りが必要と考えられる。また、不妊カウンセラーや不妊症に関心を持つ臨床心理士の陽性も重要である。

【結論】

不妊治療を受けているカップルへの支援の質を高めるには、医療的な支援は勿論であるが、不妊症の基礎知識を持ち精神支援の能力も持つ人材の育成、確保が求められる。看護スタッフに限らず医療スタッフ全員が精神支援に対する積極的な姿勢を継続し、チームとして精神支援を行うようなサポート体制を作り、さらに知識や能力を高めていく必要がある。

【文献】

- 1) 新野由子, 岡井崇: 不妊治療を受ける患者に対する支援のあり方に関する研究 第 1 報. 母性衛生 49 (1), 138-144, 2008.